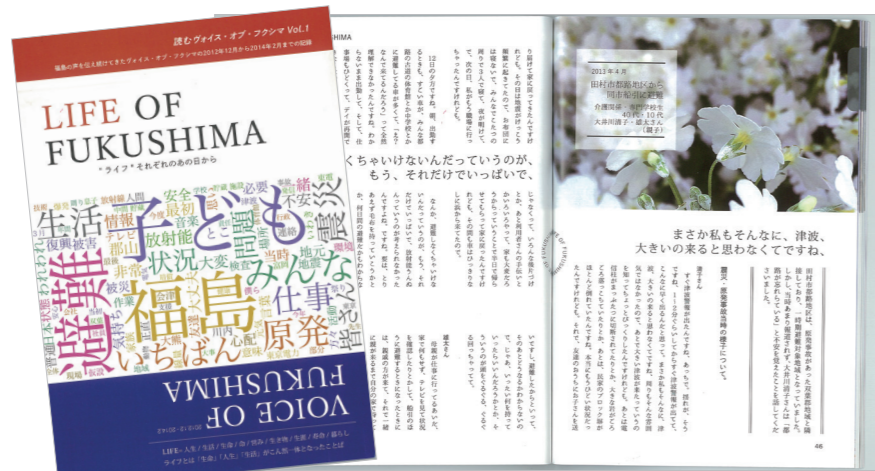


共同助成(福島県遊技業協同組合連合会)

「福島の人々の声から学ぶ震災の教訓 『読むVoice of Fukushima』制作」事業

震災後の福島の人々の声を伝え続けてきた インタビューラジオ番組から生まれた冊子

東日本大震災後の復興に取り組む福島の人々の多様な声や記憶を発信することを目的に、2012年にスタートしたインタビューラジオ番組「Voice of Fukushima」。2021年2月には放送回数が400回を突破し、膨大な音声記録が残されている。それを再活用し、震災・原発事故直後の人々の声を伝えるタイムカプセルのような冊子を完成させた。



福島の人々のインタビュー音声を文字化した記録本

インタビューラジオ番組の音源情報を 貴重な「復興知」として役立てるために

一般社団法人「ヴォイス・オブ・フクシマ」は、東日本大震災や東京電力福島第一原発事故に見舞われた福島の姿を風化させずに、どんな過酷な状況からでも復興をなし得られることを表すために、復興への取り組みや復興後の福島の魅力を日本や世界に向けて伝え続けることを目的に、2012年から活動を行っている。

主に以下の事業を行っている。①福島県民へのインタビューラジオ番組「Voice of Fukushima」の制作・配信。②富岡第一・第二小学校三春校アーカイブ教育活動。③相双地域(広野町、富岡町、飯舘村、大熊町)の小中学校を中心とした地域探究学習支援：インタビュー方法やメディアに関する指導や授業支援。④地域コミュニティ形成・避難者支援などのための歌声喫茶活動。

震災から10年が経過し、これまでインタビューラジオ番組で制作・配信した音源情報が蓄積していくなかで、それをどのように活用していくか、模索を続けてきた。福島県内でも震災の記憶の風化は想定よりも早く、記憶の継承の困難性を強く実感せざるを得ない状況にある。福島県の将来を担う子どもたちに震災の記憶の継承を求める前に、まずは大人自身が東日本大震災と原発事故による原子力災害からの教訓を導き出し、「何を語り継ぎたいか」を自覚する必要があると考えていたところ、事業担当者である現在の代表理事が3年前から大学院に在籍し、災害伝承などに取り組む研究者たちと知り合うなかで、当法人が保管している音源情報(アーカイブ)が「復興知(集合知)」として貴重な資料となり得ることを強く実感するようになった。

震災直後の取材対象者50名に 再インタビューを実施して冊子制作

そこで、同法人では2022年度、POSCの助成を活用し、震災後から保存してきた福島の人々のインタビュー音声を文字化して冊子として見える形にすることで、後世へと伝える事業に取り組むことにした。冊子にすることで、次世代の震災学習や災害伝承、震災復興に関する研究資料としての活用が可能となり、福島の人々が震災や復興についてどう考えていたのかを振り返って教訓を得られやすくなる。また、被災状況の濃淡、震災復興での人々の考えの多様性を明示することもできる。

2022年7月からテーマや掲載対象者の絞り込み、掲載にあたっての 카테고리分け(目次)などの方針を団体メンバーで検討し、震災からまだ間もない2012年12月~2014年2月末までの番組で紹介した約50人分の「震災後の声」を掲載対象とすることにした。昨年8~9月にかけて過去の取材対象者に再インタビューを実施し、さらに東北大学大学院でAIを使用して文章の内容分析などを行う学

生に協力を仰ぎ、9~11月にかけて50人の言葉をAI分析し、ワードクラウドを作成して表紙に使用することにした。11月~2023年2月にかけて誌面のデザイン・構成、文章の校正作業を行ったほか、掲載対象者への掲載許諾確認と文章の修正依頼などを行った。

インタビューをお願いすると、当初は「なぜ今さら過去の話を……」や、「もう何を話したか忘れてしまった」といった声が多かったが、原稿を送ると、「私、こんなことに悩んでいたんですね」「改めて昔の自分の話を読むのは新鮮な体験でした」といった声が多く寄せられた。現在、他県に移住して農業をしている方から、わざわざ「私たちの過去の声を掘り起こして、すてきな本にまとめてくださり、ありがとうございます」といううれしいメールもいただいた。

福島県遊技業協同組合連合会より

震災の記憶の風化が懸念されるなか、被害の激しかった福島県の人々の声を冊子の形に残すことは価値ある活動だと思います。



冊子では番組で紹介した約50人分の「震災後の声」を掲載

助成団体: 一般社団法人 ヴォイス・オブ・フクシマ

<https://www.voice-of-fukushima.com/>



助成によって活動を継続してきた証しになる貴重な冊子を制作できました

震災の記憶の風化と、その防止対策の必要性が叫ばれる一方で、日々目まぐるしく社会情勢が動き、人々が得る情報量やスピードも過多・加速しているなか、過去の災害の記憶を継承していくことは非常に困難な状況にあります。福島の声のアーカイブを11年にわたって続けてきた当法人にとって、今回の記録本が制作できたことは貴重な体験でした。

一般社団法人 ヴォイス・オブ・フクシマ
代表理事 久保田 彩乃さん